卵巣、卵管、腹膜がんにおけるインターベンションラディオロジー（IVR）による治療前組織生検の有用性の検討

研究の対象：

2005 年 1 月から 2015 年 12 月までに国立がん研究センター中央病院で卵巣・卵管・腹膜がんのいずれかと診断され治療を受けた方々の診療録を対象に、インターベンションラディオロジー（Intervention radiology: IVR）下針生検、試験開腹術などの細胞および組織採取方法の違いによる治療効果への影響を評価するための情報収集を試みます。

研究の概要：

卵巣・卵管・腹膜がんは、腹腔内で進行し症状が出にくいことから早期診断が難しく、半数以上の方が進行がんで発見されます。また、他臓器の進行がんによるがん性腹膜炎や原発不明がんと診断されることがあり、適切な診断が重要です。卵巣・卵管・腹膜がんの治療は初回手術と術後抗がん薬治療の組み合わせが標準とされますが、進行がんでは手術が困難な場合も多く、術前抗がん薬治療が標準治療の一つと考えられるようになってきました。卵巣・卵管・腹膜がんの組織診断としては試験開腹術が行われますが、全身麻酔や手術などの侵襲もあり、術前抗がん薬治療を開始するまでの期間が長くなることがありました。当院では、局所麻酔での IVR 下針生検による卵巣・卵管・腹膜がんの組織診断を行い組織診断と術前抗がん薬治療を行う場合がありますが、治療成績への影響については調べられていません。

研究の意義：

卵巣・卵管・腹膜がんにおいて、試験開腹術や IVR 下針生検などの細胞および組織採取方法の違いによる組織診断が治療効果、副作用・合併症、治療成績に影響を与える要因を検討することで、今後の卵巣・卵管・腹膜がん診療を行う上での一助になると考えられます。

研究の目的：

卵巣・卵管・腹膜がんが疑われ、病理診断に必要な検査を受けた方において細胞および組織採取方法の違いによる治療効果や治療成績に対する影響を調べることを目的とします。将来的には、本研究の結果が卵巣・卵管・腹膜がん診療において広く用いられ、より効果的な診療を行う助けとなると考えています。

研究の方法：

2005 年 1 月から 2015 年 12 月までに国立がん研究センター中央病院において、卵巣・卵管・腹膜がんが疑われ病理診断を受けた方で、検査に必要な細胞および組織採取を行われた患者さんの診療録から、卵巣・卵管・腹膜がんの病理診断および治療に必要な情報を収集し、病理診断・治療内容を検討します。

研究の期間：

この研究の実施期間は、研究許可日から２年間の予定です。

研究に用いる情報の種類

本研究で使用する情報：カルテ番号、病歴、病理診断、針生検方法、治療方法、副作用の発生状況　等

情報の公表

学会発表や論文公表などにより研究結果を報告することがあります。

個人情報に関する配慮：

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としませんので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究利用を拒否する場合の連絡先

〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1

国立がん研究センター中央病院　婦人腫瘍科　植原貴史（研究責任者）

TEL: 03-3542-2511

FAX: 03-3542-3815